

P1-511 先天性股関節脱臼に対する両側骨盤骨切り術後で自然経陰分娩が可能であった1例

信州大

芦田 敬, 大平哲史, 近藤 壮, 大瀬かおり, 岡 賢二, 金井 誠, 塩沢丹里, 小西郁生

【背景】先天性股関節脱臼に対して骨盤骨切り術を施行した女性では骨産道の横径が短縮し、分娩時にCPDとなる可能性が高いとされている。特に両側骨盤骨切り術施行後はさらにそのリスクが高く、ほとんど選択的帝王切開術が施行されている。今回、両側骨盤骨切り術の既往を有する妊婦において試験分娩を行ったところ、無事に経陰分娩に至った1例を経験したので報告する。【症例】症例は30歳、1経妊0経産、身長157cm、体重60kg。先天性股関節脱臼のため24歳時と25歳時にそれぞれ片側ずつドーム状骨盤骨切り術を受けている。今回の妊娠経過は順調で、妊娠35週に骨盤部MRIを行なったところ産科的真結合線は12.0cmと正常であったが、入口横径が11.2cmと短縮し、比較的狭骨盤であった。妊娠37週に施行したMartius法では、骨盤横径の短縮・変形がみられたが、児頭の通過は可能と考えられた。試験分娩の方針として経過観察したところ、妊娠39週1日に自然陣痛が来し、回旋異常はなく、自然経陰分娩となった。児は2736gの男児、Apgar score 9/10であり、分娩所要時間は13時間44分であった。【結語】先天性股関節脱臼に対する骨切り術後の分娩では、骨切り術が施行された年齢や術式より分娩におけるリスクが異なると考えられる。今回の経験から、両側骨盤骨切り術後であってもMRIを含む産科的骨盤の正確な評価を行うことにより、試験分娩を行う患者を選択できることが示唆された。

P1-512 クロウン病合併妊娠で小腸穿孔を発症した1例

大雄会第一病院

嶋津光真, 中北武男, 福岡浩一郎, 不破知史

クロウン病は潰瘍性大腸炎とともに炎症性腸疾患であり、寛解と再燃を繰り返す難治性慢性消化管炎症である。その好発年齢は若年層であり、妊娠出産の適齢期に重なる。妊娠中にその増悪が起こる場合がある。今回我々は妊娠中にクロウン病が増悪し、小腸穿孔を発症した症例を経験したので報告する。症例は36歳、女性、1妊1産。既往歴：アレルギー鼻炎、最終月経平成16年1月22日より5日間として妊娠した。平成16年3月23日当院に妊娠確認以後外来で妊婦健診施行。妊娠初期よりHb8.3g/dlと貧血が持続するも、明らかなクロウン病を疑う症状は認めなかった。平成16年10月15日(妊娠37週2日)腹痛を主訴として当科外来受診した。子宮収縮が出現し、入院管理となった。子宮収縮と関係なく、疼痛が著明となり、発熱、胎児心拍の頻脈、児心音の低下も認めたため緊急帝王切開術施行。2560g女児Ap9点で出生した。腹腔内は小腸液と食物残渣物を認めた。小腸と大網が癒着し、小腸の穿孔を認めた。外科的小腸切除術、人工肛造設術施行した。切除した小腸には粘膜面に縦走潰瘍形成を認めた。病理組織診でクロウン病と診断した。ペンタサとフラジールのクロウン病治療薬使用。平成17年2月13日退院。現在は人工肛門閉鎖術施行して症状は緩解中である。今回の症例のように妊娠中に発症し急激に増悪して、妊娠中の為典型的腹膜刺激症状が子宮収縮と鑑別困難な場合は産科疾患以外の疾患を念頭に起き早期診断する必要がある。また、内科や外科と小児科と連係をとり、クロウン病の妊娠や分娩に影響を考慮し適切な管理の必要がある。

P1-513 外科手術を必要とした腸閉塞合併妊娠

都立大塚病院

阿部史朗, 橋本玲子, 水口恵理子, 山口和香佐, 金子みすず, 桃原祥人, 岩田みさ子, 湯原 均

平成6年から平成16年までの11年間で当院で腸閉塞または腸閉塞疑いにて外科手術となった妊娠症例について報告する。症例数は7件であった。この期間での全分娩数は13054件であり、約2000件の分娩数に対して1件となる。7件中5件は他院からの母体搬送による症例であった。平均年齢は32歳で、入院となった週数は平均で27週であった。7件中6件で開腹手術の既往があった。原因としては6件では癒着が、他の1件では腸重積があげられた。外科的手術と同時に帝王切開を施行したのは4件であった。1件は搬送された時点で子宮口がほぼ全開しており、搬送直後に早産(27週)となって、その後外科手術となっている。他の2件中1件は34週で早産(経陰)となり、他の1件は正期産で経陰分娩となっている。診断・治療等につき文献的考察を加えて報告する。